

# 江見水蔭『女房殺し』における軍事の影 —逗子と箱根に着目して—

安藤 史帆

## 要旨

本稿は、江見水蔭の代表作とされながら作者の美的価値観と通底するものとしてのみ解釈されてきた『女房殺し』を、軍事（日清戦争）の問題から再検討するものである。その際、特にそれに関わるものとして、逗子、東京、箱根などへの移動、空間の対比に着目する。まず、『女房殺し』成立過程に注目して、作者水蔭と軍事との関わりを確認したうえで、作中で直接的に日清戦争の影響が言及される以前から、その軍事的気運が細部に埋め込まれていることを示す。次に、軍事的背景を取り込む逗子という舞台において築き上げられた不均衡な力関係を探り、同時代状況に通ずる帝国主義的認識を堅吉が内面化していることを明らかにする。最後に、堅吉の美的カタルシスとして読み込まれてきたお柳殺害と自死のエピローグを、日清戦争従軍者の戦後の問題と箱根への温泉旅行という観点から、堅吉とお柳双方の文脈に沿って検討し直す。都市と行楽地との間に築かれた支配関係と戦争の影に着目することで、文学史の〈悲慘小説〉の枠組みや作者の美的価値観へと結びつけられた一義的解釈を刷新し、日清戦争に伴い形成された思想や価値観と連動すると同時に、その矛盾を浮かび上がらせる物語として本作を再読する。

**キーワード：**江見水蔭、箱根温泉、逗子、日清戦争、軍事

## 1. はじめに

江見水蔭『女房殺し』は、1895年10月『文芸倶楽部』に発表された作品である<sup>1</sup>。本作のあらすじは次のようなものとなっている。天文学を学ぶ堅吉は、脚気の治療で訪れた逗子で、土地の娘お柳を見初めた。二人は結ばれ、お柳の祖母美代とともに東京で暮らし始めるが、夫堅吉の日清戦争従軍に伴い離れ離れになった。その間に美代は死に、お柳は美代の葬式代のためにやむを得ず不貞を働いてしまう。戦地から帰った堅吉はその事実を知って絶望し、夫を前にお柳は罪の意識に苛まれた。二人は、箱根温泉へと旅行することでその現実を忘れようとしたが、旅行の最後に逗子を前にして堅吉はお柳を殺害し自死してしまう。このような内容の本作は、「水蔭の作中にては上々吉のものなるべし」（斎藤緑雨）<sup>2</sup>、「近日の最も成功したるものゝ一」（内田魯庵）<sup>3</sup>などの高い評価を

受け、水蔭の傑作ないし代表作とされてきた。

しかし、これまで本作の内容についてはほとんど吟味されることがなかった。齋藤秀昭選『明治深刻悲慘小説集』（講談社、2016年）に所収されていることからわかるように、日清戦争期に流行したとされる、死や貧苦など社会の暗黒面を扱いながら読者の好奇に訴えるような偏狭性・奇癖性を提示するだけの〈悲慘小説〉<sup>4</sup>同様の傾向が看取されるにとどまっている<sup>5</sup>。

そのような中で、『新日本古典文学大系 21 硯友社文学集』（岩波書店、2005年）の「解説」において猪狩友一は、『旅画師』（『文庫』、1889年）など初期作品における「芸術への憧憬、危惧、執着といった純粹さ」<sup>6</sup>に通じるような、水蔭の時事的な〈美術〉への関心を読み解いている。まず、猪狩が着目したのは、お柳の水浴（裸体姿）を堅吉が目撃する場面だ。本作の発表数か月前、1895年の第四回内国勸業博覧会（京都開催）では、美術館前に龍の口から水が噴きあがる噴水が設けられた。その博覧会に出品された黒田清輝「朝妝」の裸体画は、浴後に髪を解きほぐし結び直そうとする裸体の女性が描かれていたために批判が寄せられ、世間の耳目を集めた。龍の口の噴水のある場に裸体女性が現れるという本作の設定が、このような同時代の美術的動向に接近することを確認したうえで猪狩は、お柳の裸体を捉える堅吉の視線が裸体画へ向けられた美術的批判と重なり合うことを指摘する。

前述した黒田の裸体画は、「俗界に於ける浴後の裸体婦人が平然立つて鏡に対するが如き何の美趣のありとするにや」<sup>7</sup>というように、日常的な浴後の姿が描かれていたことが問題視され、「理想的の裸体画を是とし、現実的の裸体画を非とす」立場から批判を受けていた。猪狩は、お柳を「海女」に見立てて、「現実的」というよりむしろ「理想的」に近いものと見做す堅吉に、初期作品の芸術家主人公同様の美的態度を看取した。そして、お柳殺害という残酷な事態を、堅吉がお柳の〈美〉に執着し、「現実のもろもろの醜悪さに直面し」、「抜き差しならぬ絶望に陥」った結果であるとみて、流星を見ながら堅吉が自殺し、「すべては流星のごとく消えていく」結末の「カタルシス」に、「虚無の上こそ美がある」という作者水蔭の〈美術〉の答えを読み解いている<sup>8</sup>。

しかし、猪狩の分析では捉えきれない、本作を解釈するうえで要となる観点がある。それは、軍事ないし日清戦争との関わりである。水蔭は、『旅画師』をはじめとして〈美術〉に関与する作品を残したあと、日清戦争中には軍事小説を手掛けており、水蔭の創作活動の中で初期作品と本作は単純な連続性に置かれていない。また、「日清戦争の影響」で家計が困窮し堅吉が従軍しているように、日清戦争という同時代の軍事的出来事が一つの転機ともなっている。それを踏まえるならば、美術的観点から軍事的観点へと転換していく作者の立場の変容と合わせて、軍事という観点から本作を読み解く必要がある。

さらに、その軍事との関連の中で検討すべき問題が二点ある。第一に、本作における登場人物の移動の問題である。東京と逗子の間を堅吉、お柳が行き来するばかりでなく、

日清戦争を背景に堅吉は異国へと赴き、箱根へと旅行する。日清戦争を背景にしながら本作に織り込まれる、東京と娯楽要素を取り込んだ逗子や箱根温泉への移動が、いかに堅吉とお柳の運命に作用するのか解説する必要があるだろう。

また第二に、〈美〉の対象物としてお柳を扱い、美的カタルシスとして結末を片付けることに潜む暴力性である。猪狩の指摘にしたがえば、現実に見たはずのお柳を「海女」に見立てて「理想的の裸体」すなわち「是」とされる〈美術〉の対象物とすることで、堅吉はその存在を認識することができたといえる。そうであるとすれば、美的価値を付与することでしかお柳を認識しえず、お柳を最終的に殺害する堅吉の中に、まなざしの暴力を読み取ることができるのではないか。さらに、お柳を「道徳的無能力の人物」と見做して、「無教育なる、賤陋なる婦人（中略）が無邪気なる罪惡を犯せしに忍び得ずして己れの潔癖を保全せんが為に之を殺し且つ自ら殪るゝ」<sup>9</sup>とお柳を顧みることなく自死する堅吉の最期を称賛してきた同時代評価にも堅吉の暴力が踏襲されている。逗子において開かれ、温泉を経由して閉じられる、堅吉とお柳の二人の関係の発展と崩壊の過程を検討し直し、空間の移動および暴力の問題と軍事の接点を明らかにする必要がある。

よって本稿では、逗子、東京、箱根などへの移動と空間の対比の問題に着目し、同時代の軍事国家整備の状況とどのように関与しながら『女房殺し』の作品世界が構築されているのか解き明かす。そして、それがいかにお柳と堅吉の夫婦関係に接続されるのかを読み解く。そうすることで、堅吉の美的カタルシスに回収するのではなく、対外戦争の道を歩み始めた日本社会の動きや、それに伴い形成される思想と連動する物語として本作の読みを深め、その位置づけを問い直したい。

## 2. 物語を支える軍事——横須賀線、天文学、従軍

まず、本節においては、『女房殺し』成立の過程に注目して、作者水蔭と軍事との関わりを確認したうえで、本作において直接的に堅吉とお柳に「日清戦争」の影響が生じる以前から、その軍事的気運が細部に埋め込まれていることを示しておきたい。水蔭は、初期作品発表後、各紙誌へ小説を寄稿したが、金を得ては放蕩するようになり借金を抱えた。そんなとき、武内桂舟の勧誘で、1894年10月に中央新聞へ入社した。入社当時は閑職だったが、戦地から帰ってきた早川隆介代議士を12月に社に招いて聞いた戦争談をもとに「夏服士官」を発表し、それが好評だったこともあり、中央新聞では引き続き軍事小説掲載の計画が立てられた。水蔭自身は従軍することはなかったが、戦争報道から着想を得て、一日一篇読切の「キワ物」軍事小説『電光石火』を中央新聞に連載した。当時の「空気」を水蔭は次のように述べている。

戦争の為に文壇は沈黙せずにはゐられなかつた。(中略) 実際自分は筆を以て剣に代へ、国難に殉ずるだけの意気は持つてゐた。(中略) 素より戦争のキワ物小説ではあ

るが、併し、文芸品としても取扱へる事を心掛けずにはあなかつた。(中略)『電光石火』は大当りで、毎日読者から賞讃書が机上に山、とまでは行かぬが、多数に來た。それで又紙上で發表して人気を煽る事を忘れなかつた。<sup>10</sup>

「大当り」となった『電光石火』は、後に『水雷艇』および『速射砲』(博文館、1895年)に収録された。これら水蔭の軍事短編小説は、国家のために一命をかけて活躍した軍人や兵士に加え、その活躍と国家の勝利を願う銃後の人々を題材としている。こうして、「当時の戦争を背景とした帝都の空気」に便乗し、「戦争新聞として成功した中央新聞」に参加して、戦意高揚に貢献する軍事小説を書くことによって、水蔭は一つの成功をつかむことができた。

このような軍事小説の成功のあとで日清戦争終結において起稿されたのが、『女房殺し』であった。水蔭は、『文芸倶楽部』が「非常な勢ひで売れ出して居た」ことから、この誌の「巻頭小説として、是非採用を得たい」と考え、「俗受の名で、読者を釣るといふ小細工」からその題名を付けた(1895年6月13日起稿、7月25日脱稿)。すなわち水蔭は、軍事的気運によってもたらされた新聞紙上での成功を活かして、世間の動向に敏感に反応しながら、本作の創作を試みたのである。

もちろん、『女房殺し』では、軍事小説のように、戦場や銃後の生活を題材とし、戦勝の喜びや、戦争に貢献した者への敬意といった戦争色が強調されているわけではないのだが、本作においても日清戦争の軍事的空気が利用されている。まずもって意識されるのは直接的に描かれる「日清戦争の影響」であろう。九章において「紡績の利子とても日清戦争の影響で、少ない上に余程少なく、望む口はなくて、浪々で居らねばならぬ」というように、日清戦争が家計の困窮を招く要因となり、従軍の契機となっていた。ただ、そのように直接的に「日清戦争」へ言及が為される以前から、軍事的趣向が取り込まれていることを、堅吉を逗子へと運ぶ横須賀線、堅吉が学ぶ天文学という側面から補足しておく必要があるだろう。

まず、物語の大部分の舞台となる逗子に注目してみよう。冒頭では、「此辺」とされる逗子周辺で、「今年」になって「めき／＼」と東京や横浜の資本家やエリート層の別荘が増殖し、遊客が入込んだことが明示されている。この遊客の内の一人は薄井毅、一人は堅吉なのであるが、こうした遊客の入込に横須賀線開通が貢献している。薄井は堅吉の父の元同僚であり、堅吉の父を辞職に追いやったあと、参事官に上り詰めた人物である。堅吉が日清戦争に出兵するのが四年後であることからすると、冒頭でいう「今年」とは1890年となるが、この前年6月には横須賀線が開通している<sup>11</sup>。大船-横須賀間は、もともと鉄道局の計画に入っていなかったが、陸軍大臣、海軍大臣連名による鉄道建設請議が1886年6月22日付で内閣総理大臣宛に提出され、東海道線の支線として路線建設が進められることになった。大蔵大臣は、東海道鉄道建築費に余裕がないのを理由にあげ

て請議の採択に反対したが、閣議の決定によって、東海道鉄道建築費から一時流用して建設費が賄われることとなり、横須賀線建設は強行された。横須賀線開通が重要視されたのは、海軍の横須賀鎮守府と陸軍の観音崎灯台への兵員、物資輸送に有益な路線であったからである。人員、資材、食料などを補充する手段として、陸海軍ともに、鉄道建設が急務であったのだ<sup>12</sup>。こうした軍事的背景も踏まえ開業した横須賀線は、当初は単線で、大船-横須賀間に鎌倉、逗子の二駅が設けられた<sup>13</sup>。逗子に繁栄をもたらし、薄井や堅吉を逗子へと運ぶ契機は、軍事目的から開設された横須賀線によって用意されており、軍事的背景に支えられた本作の姿が浮かび上がってくる。

このように軍事と固く結ばれた横須賀線によって運ばれてくる遊客の中でも、とりわけ注目されるのが堅吉だ。「脚気療養」のため逗子にやって来た堅吉は、海水浴客で混み合う潮頭楼に宿泊している。堅吉は「理科大学の選科」へ入り、「天文学を専修」するため、受験勉強に明け暮れる。

扱ては数学を勉強して居るのか。(中略) 人が遊ぶ中にあゝやつて独真面目なのは、脚気ゆるゆるの転地療養か。今時の若さに感心な人だと初めの愚弄は後の敬服と成つて、皆が気を付けて上げる様にいつしか成つた。(1:3/424-425)

宿の主人や女中は、最初は堅吉を、理解しがたい変人と認識していたが、宿帳の「東京市芝区桜川町二番地田村方。静岡県土族。近藤堅吉。二十三歳。数理学校生徒。脚気療養。」という情報から、その認識を転換させる。宿の主人や女中は、奇妙というべき堅吉の様子が、他客が遊ぶ中、「数学を勉強して居る」姿なのだを知ると、質素で勤勉真面目な人物と堅吉を認識し直し、「愚弄」から「感心」や「敬服」の対象と見做すようになっている。

さらに、堅吉は「木蔭の茶屋」においても、そこの婆さんによって高く評価される。堅吉が通う茶屋では、古びた客用の椅子や床机等が並べられ、「螺の殻」、逗子の辺りを詠んだ句の記された「聯」、「軒提燈」等が遊客向けに設えられており、客の間では冷えた「藤沢桃」と「十四」ばかりの美しい小娘が「此辺の輿論」となっている。しかし、こうした観光地じみたものに、堅吉は他客のように関心を示さない。書生らが海水浴後、あるいは昼寝後に、時間潰しに来るところとして栄える茶屋で、他客が訪れない時間帯にやってきては「勉強」する堅吉の姿に婆さんは「感心」し、その行末の「出世」を見込んだ。

『僕は理科大学の撰科へ這入つて、天文学を専修したい』と答へた。大学の日本で一番ゑらい学校といふ事は知つて居ても、撰科といふのは正統の順序を踏まぬといふ事は知らない老婆。天文学と言つては昔の軍師が心得て居る、あの天文の事と思つ

たから、婆さん、何かなしにゑらく敬服して、益々堅吉に重きをおく (3:6/429-430)

堅吉の「理科大学の撰科へ這入つて、天文学を専修したい」という発言を聞くと、婆さんは「日本で一番ゑらい学校」に入学し、「軍師」の心得る天文学を志す堅吉をよりいっそう社会に有用な立場として期待する。「理科大学」とは、帝国大学理科大学のことで、1886年公布の帝国大学令によって分科大学と大学院から成る帝国大学が発足した。各分科には、正科と撰科とがあつて、高等中学校卒業出身である場合に、正科へ入学が可能であつた。堅吉のような私学出身の場合、「撰科」への入学となつたが、「撰科」は正科の欠員を埋め合わせる形で募集され、修業年限は同じ三年でも、修了して学士号を与えられることはなかつた。いくつかの試験に合格し、所定の条件を満たせば正科と同等に卒業認定と学士号が与えられたが、至極稀なことであつた<sup>14</sup>。婆さんは「撰科」が「正統の順序を踏ま」ないとは知らないが、「日本一の学校」である帝国大学を目指す堅吉に「敬服」の念を抱いている。

こうした宿の主、女中、婆さんから堅吉に向けられた「感心」や「敬服」には、当時の学問や勉強に対する印象や期待が反映されているだろう。「模糊たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力」<sup>15</sup>を持っていた森鷗外『舞姫』(1890年)の豊太郎と同時代に生きる堅吉の姿もまた自身の欲望よりも国家や家の「行末」のため努力に励む「勉強」家と捉えられたといえる。また、学制の教育方針である被仰出書に、悔いのない生涯を送るためには、学問を修める必要があることが示されていたように、当時、教育は立身出世主義の手段として認識されていた。初等教育が整備されつつも、未だ高等教育の道が狭かつた時期において、「二十三歳」にもなつて、学問を志すことは容易ではなかつたはずだ。高等教育への道が開かれない境遇の者から堅吉に向けられた敬意は、立身出世主義と結びついて信奉される期待と重なり合うものであつた。

こうして、逗子の人々から期待を寄せられる堅吉は、物語の中盤で、自身が学んできた「数学」や「天文学」を取っ掛かりに日清戦争従軍の契機を得ることになる。堅吉は、「数学に達して居」たばかりでなく、「天文学」を修めたことで、「日清戦争」の際に「陸軍参謀本部の傭員」として「測量隊」に加わつて参与する。

ここで、「天文学」が、婆さんにとっては天体の運行から戦いの帰趨を占い前近代において戦時において活躍する「軍師」を連想させるものだったわけだが、物語半ばで近代的戦争へと結ぶ学問分野ともなっていることに留意すべきだろう。西洋数学は、1872年の学制において導入され<sup>16</sup>、西洋式軍事技術導入にも寄与し、固有の教育的価値のみならず、産業・軍事の側面からも国家の発展に寄与する学問と考えられていた<sup>17</sup>。また、明治時代、天文学研究は、数理学研究の一環として発足した。お雇い外国人による天文学教育を経て、1878年に東京大学理学部の中に数理・物理学及び星学科も設けられ、同年9月には理学部の勸象台(天文気象観測所)が本郷富士町の文部省用地に落成した。こ

の頃、明治政府の内務省、海軍省が各々に天文観測の必要性を主張し、観象台を設置していた。内務省は暦作製と陸地図作製、海軍省は航海路図作成と航海天文学、文部省は天文学教育という目的を掲げ、それぞれに天文学を重視した結果、1888年に誕生したのが、三省統一の天文台、東京天文台だった<sup>18</sup>。そして軍事と結びついて教育として発展する契機を得た天文学は、日清戦争において、天文観測を用いた測量による内陸図、航海図作成のため、陸海軍に利用されることになる。

1894年9月下旬には陸地測量部から従軍班を戦地に送った。正規職員だけでは人員が不足していたこともあり、一般に測図手雇員を募集し<sup>19</sup>、天文学・数学の知識のある者が採用された。堅吉の従軍先の遼東半島は、日清講和条約締結直後の三国干渉によって、清国に還付せざるを得なくなり、8月上旬までに全ての兵を撤退することが明示され、6月には臨時測図部は解散されている<sup>20</sup>。その結果、堅吉は帰国を余儀なくされたと考えられるが、戦地での難航しながらの測量部隊の活躍によって日本軍は中国国内の綿密な地図<sup>21</sup>を作製することができた。「天文学」は、堅吉に「天文家」としての活躍を用意することはなかったが、地図作成の軍事利用という点において、戦争での活躍を用意した。

水蔭は、本作の天文学・数学的知識は日清戦争に陸軍測量部員として大陸に実際に渡った竹貫佳水から得たという<sup>22</sup>。佳水は1894年12月に陸軍省臨時測図部雇員となり95年2月に遼東半島へ渡った人物だった<sup>23</sup>。横須賀線、天文学、従軍といった三点に注目したとき、少なからず日清戦争という時事的な出来事を背景に、逗子という舞台と堅吉という登場人物に輪郭が与えられていたということができる。酒井敏は、水蔭の日清戦争時に手掛けた軍事短編小説について「国際的な視野とか政府の思惑とかは無縁なレベルで紡がれた、庶民にとっての日清戦争のありさまを伝える物語」<sup>24</sup>と位置付けていたが、表立ては軍事を中心に取扱わない本作においても、同様の趣向が見られ、日清戦争という同時代の軍事的な出来事との連動性を看取できるのではなかろうか。それでは、こうした背景の中に置かれ輪郭を与えられた堅吉は、お柳と逗子、東京、箱根を介していかなる関係を築いたのか。そして、「カタルシス」が読み解かれる悲劇的な結果はいかにしてもたらされるのか。次節以降では、作者が作品世界に軍事的背景を取り込んだことで、本作はいかにして登場人物の間に不均衡な力関係を築き上げ、いかなる同時代の問題を映し出してしまったのかを検討する。

### 3. 逗子における訪問者と土地の者

堅吉とお柳の関係を探るうえでまず注目したいのは、横須賀線開通によって発達した逗子において、土地の者と訪問者との間に不均衡な関係が結ばれていることである。それは第一にお柳と薄井毅との関係に示唆されている。この開業年に、薄井は逗子へと初めて訪問し、お柳の父に金を支払ってお柳を犯した。

同時代には、内務省衛生局初代局長を務めた医師長与専斎によって鎌倉に(1884年)、

陸軍軍医松本潤によって大磯に（1885年）、陸軍軍医石黒忠恵によって逗子に（1889年）海水浴場が開設されていた<sup>25</sup>。海水浴や温泉浴などによる転地療法を提唱しその普及に力を注いだドイツ人医師ベルツは、相模湾に面する江ノ島、大磯、熱海、箱根などを訪れ、避寒避暑の適地として葉山に別荘を建て、相模湾一帯の別荘ブームの先駆けとなった<sup>26</sup>。避暑地開発が進む中での横須賀線開業により、上流階級の人々の別荘建築は加速し、丘陵地の山林が高値に取引され、地権者の懐を潤した反面、大金が流入したことで物価が騰貴し、庶民の家計を圧迫することとなった。逗子駅開設は住民の請願によって実現したことであるが、利益を生み出す一方で、経済格差を生み出していた<sup>27</sup>。このように、薄井とお柳の間には、訪問者の金と権力によって土地の者が犠牲となるという不均衡な関係が浮き彫りにされている。

それでは、こうした薄井のお柳に対する仕打ちに怒りを覚え、薄井を軽蔑し、非難する堅吉は、お柳という土地の者との間で、均衡関係を築いていたといえるのだろうか。堅吉は、土地の者から注目されるに値する〈知〉を保有していた一方で、土地の者が堅吉に示すほどに、土地の者への関心を示すことはなかった。お柳に対しても同様で、当初、名さえ知ろうとしなかった。しかし、茶屋の裏にある噴水で水浴びをするお柳を目撃したのをきっかけに、堅吉は無関心な態度を変容させる。

髪を洗つたものと見えて、黒い、濃い、長い、髪が、白い肌の上に懸つて居る。（中略）手には桃を持つて居る。恰も海女が龍宮で珠を取つて来たかの観。（3:5/428）

堅吉は、「紅い腰巻」をつけ、白い肌に水にぬれた「黒い、濃い、長い」髪が垂れるお柳の裸体に、「海女が龍宮で珠を取つてきたかの観」を抱いた。それから堅吉は、「数学マスマチツクの頭が零ゼロに成つて、恋の脳が無ラブ限大インフイニチー」になる。そうして逗子の小娘を「お柳」という名で認識するようになったわけだが、ここでどうして堅吉は恋の対象としてお柳を認識し得たのであろうか。

龍宮の宝珠を持つ海女という比喩について『海人』の能に由来する表現であると指摘する猪狩の指摘<sup>28</sup>を借りて堅吉が咄嗟に抱いたイメージを探るとすれば、海女は妻および母の象徴として見出されたと考えられる。藤原不比等と海女の関係が描かれ、二人の子藤原房前が亡母の追善供養をする『海人』の物語の枠組みを踏まえたとき<sup>29</sup>、海女は、夫の願いを受け入れ、夫のために命を惜しまず宝珠を取り返しに行く妻（母）である。それは水蔭が軍事短編小説で描いた、戦争に行く夫を子どもと共に見送り、あるいは戦中、夫を思い待ち続け、あるいは負傷した夫を出迎える妻（母）の姿に呼応するような、「是」を見出せる像だった<sup>30</sup>。その意味で、戦中に称揚されるような理想的な妻（母）の像をお柳に見出すことができたのである。

一方、「吾妻に成り得べきや」とお柳が自分の妻にふさわしい人物かどうかという点に



「<sup>インタラゲーション</sup>疑問点」を持ち、理想を現実とするために、お柳に自分と同様の水準を保持させようとする堅吉の姿が浮かび上がってくる。それはたとえば、堅吉がお柳へ結婚を申し伝える場面の中に顕著に表れている。「僕が東京へ連れて行く」、「祖母さんも一所に僕が東京へ引取ふ」というように、堅吉はお柳を「東京へ連れて行く」として、夫婦になるために、お柳を逗子という場から連れ出す必要があると感じている。さらに、お柳の監督者たる「祖母さん」ごと逗子から東京に「引取り」、自身が監督者となることを表明するばかりでなく、自分が迎えに来るまでお柳を「充分教育」させることを望んでいる。

大学の撰科へ入学して、卒業するまでには、未だ三四年あるから、其間に充分教育したらいいが、それでは待つのがいやだろう（中略）それなら僕が出世するまで、しつかりとお婆さんにあづけておくよ（6:14/441）

自身の妻とするためには、お柳に「充分」な「教育」が必要であるとする堅吉は、自分が「出世」するまで、その責務を保護者であるお美代に任せ、お柳を「あづけ」ておくという。このようにして、お柳の逗子における生活水準や文化水準を自分より下に位置づける堅吉は、薄井とお柳の過去の事件について、薄井や金欲しさに、わが子を身売りさせた「親父」ばかりでなく、周囲でそれを容認した「端の者」の責任も問うている。

お柳は未だ稚かった。（中略）実に通常の脳力は供へて居なかつた。親父が悪かつた、端の者も悪かつた、第一望を属した者が悪かつた。お柳は何も知らぬ内に汚点を付けられたのである。（8:20/451）

堅吉は、「通常の脳力は供へて居ないお柳の教育水準の低さ、そして売買春が行われるような逗子という地の文化水準の低さに着目し、お柳を「東京」へと「引取り」、逗子を離れた後も、「習字をさしたり、読本を教えたり」して、その水準を引き上げようとしていたのである。

こうした堅吉の認識には、未開野蛮な植民地の被支配者を教化し文明開化させることを責務として捉え、一方的な文化の押しつけ、現地資源の開発など、自らの搾取と支配を正当化する植民地主義的な思考が働いている<sup>31</sup>。支配・侵略の正当化は、先述の戦中執筆した軍事短編小説においても垣間見られる要素である。一例として、『水雷艇』に収められた「軍夫の殺人犯」と「捕虜」という作品を参照してみよう。

「軍夫の殺人犯」は、「分捕の金銀塊」を手に入れるため殺人を犯す軍夫たちを描く物語であるが、そこでは戦地での略奪行為が正当化されていた。また「捕虜」は、「東京」へ連れて来られてのんびり過ごし、帰郷を拒む中国人捕虜たちの墮落した「精神」と、中国で捕虜となったことを恥とし、本国への帰郷を前に死を覚悟する日本人兵士の「精

神」を比較する物語である。そこでは、「日本人はゑらい、支那兵は駄目／＼」と日本を称賛するに留まらず、帰郷を拒み「日本へ来て安楽に暮して居られるといふのは有難い」と侵略を好意的に受け取る被支配者側の心境を描くことを通して、中国への侵略が肯定的に映し出される。

このように軍事的背景において形成された侵略の正当化が、本作においては土地の者と訪問者の関係の中で更新され、被支配者の教化にまで及んでいる<sup>32</sup>。「習字」や「読本」といった〈知〉を与え、「きづもの」だと知りながら「何んにも言はずに」お柳を妻にした自身の立場を優位に立たせる堅吉は、いわば土地の者としての他者の価値観を無視して訪問者としての自身の価値観を押し付ける支配者（侵略者）である。堅吉とお柳の間にはこのような植民地主義的な不均衡な力関係を確認することができるのだ。

お柳という他者を支配しようとする堅吉には、同時代の軍事および政治的文脈に通底するような帝国主義的な意識の内面化をうかがうことができ、軍事目的で開設された横須賀線により発展した逗子を舞台として、訪問者から土地の者にもたらされる経済的な搾取や精神的暴力が堅吉を通して明らかになるのである。

以上のことに作者水蔭がどれだけ意識的であったかはわからない。しかし、作者が世相に迎合的なスタンスに終始する傾向を持ち合わせ、当時の社会的な出来事として軍事ないし日清戦争を取り扱ったからこそ、暴力の正当化に加担するような社会の大多数が共有する認識構造や価値観を本作は映し出してしまったのだ。

さらに訪問者と土地の者の間の不均衡な力関係の暴力性が、戦争勃発後にお柳殺害と自死というかたちで露呈されることとなる。次節では、堅吉がお柳に対し行使する最後の暴力とその正当化を孕む自死について、戦争の勃発と戦後の問題から検討する。

#### 4. 温泉への移動と〈軍事〉

前節で見てきたように従軍以前から堅吉はお柳を精神的に拘束し抑圧してきたが、帰った後にはお柳を殴り、果ては殺害するというかたちで直接的に暴力を行使し自死する。本節では温泉旅行を通じて堅吉がお柳の殺害に踏み切り自殺に至る顛末を検討し、堅吉の「カタルシス」として読まれたエピローグを、堅吉お柳双方の文脈から捉え直す。

お柳殺害は従軍中にお柳が薄井と再び関係を持ったと堅吉が知ったことが主な原因であるが、その暴力の発露と従軍という軍事的事実は無縁ではない。まず、夫の従軍中に不貞を働いた妻を殺害するという結果は、夫の戦功を祈り貞操と家庭を守るという戦時における妻の役割規範を伝えるものとなる。一方、その結末は、日清戦争従軍者の戦後をも浮かび上がらせている。お柳を殴りながら「我は何んの為めに支那へ行った（中略）天文学上何んの発見する処もなく、碌々として今日……測量隊と成つて支那へ行く、こんな意久地の無い人間としたのは、誰だ、誰だ」と問うように、堅吉は従軍後に置かれた自身の身の程に絶望を感じている。また、「遼東半島で苦勞に苦勞を重ねて居る内、一

日片時も忘れはせぬ、それはお柳と箱根へ行つて、一月ばかり楽々と暮して、遠征の疲労を休めやうといふ」従軍中の「理想」に触れるように、多大なる肉体的疲労も抱えている。尊敬と称賛のまなざしを受け従軍し、戦地で大変な経験をしてきたが、終戦後に帰参すると周囲の状況が一変していた。従軍すれば生活が改善されるという将来や社会への期待を裏切られた堅吉は日清戦争によってもたらされた絶望と幻滅を抱える一戦争体験者である。すなわち堅吉の抱く「不快」や「不愉快」は、お柳の不貞という事実ばかりでなく、戦争によってもたらされた状況に起因するものなのだ。

そして、そのような絶望の状況を「忘れるため」に決行されたのが箱根旅行だった。ここで箱根が選び取られたのには、当時の箱根が、湘南地域と同様に、観光地化ないしリゾート地化し、富裕層（ある程度休暇や給与が保証された人々）にとって、余暇を過ごす別荘地あるいは家族・夫婦の旅行地となっていた<sup>33</sup>ことが関係しているだろう。

当時、実際に旅行できるのは限られた人々だったが、修学旅行、上流層の旅行記、観光案内広告が新聞メディアで報じられ、観光旅行が人々の間で理念的に浸透し始めていた<sup>34</sup>。また、明治10年代には新婚期間を意味して使用されたHoneymoonは、明治20年代頃から新婚旅行を指す言葉として扱われ始めており、夫婦や家族の愛を紡ぐ旅行地として温泉場が提示されるようになっていた<sup>35</sup>。だからこそ、堅吉は、従軍によって得た金で、お柳とこうした「理想」の温泉旅行を果たそうと戦地から夢見ていたのであり、実際「箱根」は、「二人の未だ曾て味ふた事の無い極楽の境」いわば幸せの極地となったのだ。したがって堅吉にとって温泉場は、「つひに見た事のない堅吉が此頃の嬉し気」をもたらし、現実にある「旅のつかれと彼の不快の念とを勉めて忘れ」られる逃避空間として機能したといえるだろう。

しかし温泉旅行による「不愉快」、「不快」の遮断は一時的なものに過ぎなかった。温泉場を出て訪れた江の島の実に「見晴しの好い家」で目に入ったのは、二人の出会った「逗子」の地と貝殻から作られた「金釵や細工物」である。

逗子の夏は昔、今は江の嶋の夏。(中略)曾てお柳が拾集め、堅吉も手伝うて撰分け  
て遣つた貝がら、其金釵や細工物を売る店が沢山にある。思ひ出せば今昔の感に堪  
へぬ。(12:31-32/468)

かつて、お柳は貝殻を選り分けることを日々の仕事とし、堅吉と二人で「撰分」たこともある。東京で受験勉強する最中に堅吉は机上に置かれたその貝殻を見てはお柳を思い出していた。ここで貝殻は、その「曾て」を思い出させるばかりでなく、お柳が訪問者である堅吉自身とは不相応な生産者身分の土地の者であることを再認識させる。堅吉は、「思ひ出せば今昔の感に堪へぬ」と振り返り、従軍以前の「昔」には戻れない、大船での「今日」の絶望と幻滅の状況へと立ち戻ってしまう。そして、それを補填するかのよう

お柳への暴力が行使されるのである。

温泉場は、戦地での「不愉快」さを遠ざけるばかりでなく、堅吉とお柳の両者が訪問者として共有する空間となり、堅吉に訪問者と土地の者という二人の間の差異を見えなくさせ、お柳に対する「不快」を忘れさせる場となった。しかし、温泉場の一時的な忘却は、堅吉の支配的な認識の行き詰まりを解消するのではなく、むしろ「彼の生れた漁村では、こんな事は何んでもない」という認識を強めさせ、「我が思ふ程の大罪」と思わない「至極無邪気」で「無能力」なお柳の「無教育の弊」を追及させる結果をもたらしてしまったのだ。

このように、身体と精神の回復の場と見做されながら、他方で殺意の生産に貢献してしまう温泉場もまた逗子と同様に軍事と無関係ではない。箱根に廃兵院と呼ばれる傷病兵収容施設が創設されたのは、1907年の日露戦争後だが、箱根の旅館が「去る二十七八年戦役の時にも傷病兵転療所をつとめ」<sup>36</sup>たというように、既に日清戦争において傷病兵の転地療養所に温泉が指定されていた<sup>37</sup>。明治初期から衛生国家建設のため全国調査が進められ、国家の管理下にあった温泉は、〈観光〉の場として成立する一方で、戦争遂行体制を支える軍事医療システムに組み込まれ機能していた地でもあった。すなわち、堅吉の暴力を最終的に再生産してしまう温泉場は、兵士の身体と精神を回復させ戦争に貢献する温泉場の同時代の現実と無縁ではなく、陸海軍の要請により建設された横須賀線の恩恵を受けて栄える逗子と同様に、軍事の延長線上にあったのだ。

温泉はまた、堅吉による精神的抑圧が、いかにお柳に及んでいるのかを明らかにする場としても表れている。日清戦争を機に、堅吉とお柳は物理的に引き離され、二人の間で仲介者となっていたお美代は死んでいる。従うべき言動を提示する夫と、思考し行動することを代行する仲介者が不在のお柳のもとへやって来たのは、薄井の手先のお鉄である。彼女はお柳を丸め込んで薄井のところへと連れていくため、「全体お前さんは今の旦那を如何思つておいでかい」と問う。それに対し、一方的に教育され、「次第／＼に面白くなくな」りながらも、「末が楽しみだと思ふて、口へも出」さず「うから／＼」と堅吉と婆さんに従うばかりだったお柳には「如何つて別に」のほかには答えることができない。自身のあるべき姿、従うべきことを提示されるばかりで、自身が「如何」思うのか、お柳はそれまで思考する余地を与えられていなかったのである。

『如何したのだなア』と激して来た『寔に済みません』と言つて下を向いて仕まつた。(中略) 彼の汽車へ無理に載せられた時に、舌でも喰切つて何故死ななかつたらう。東京へ着いた時に、何故死ななかつたらう。(中略) 何故うか／＼と東京を見物して来たろうか、まア如何してお鉄に引張り廻されたらうかと、今始めてお柳は目が醒めた。(11:29/464-465)

夫である堅吉との再会において、お柳は「如何して」と投げ掛けられるばかりか、自分自身に「何故」、「如何して」と問いかける。そして、「如何して妾は這んなであろう、もう良人に殺されても仕方がない」、「妾は馬鹿だ、何一つ取柄の無い馬鹿だ、早く殺されて此苦しみを救はれたい」と思い詰め、旅行中に「彼の大罪を本統にゆるして被下つたのであろうか」と考え込んでしまう。夫に再会し、姦通の罪を責め立てられることで、自身の妻としての立場を確認し、妻として「目が醒めた」お柳は、堅吉が植え付けようとした価値観を、強迫観念のようにして思い返していくのだ。そして、「良人が余念なくおのれを愛する処を見ると、全くゆるして被下つたに相違ないと安心する」一方で、「其安心は又時々破れ、破れた跡から繕う作業を繰り返す場となった温泉場は、お柳に堅吉との関係における希望を与えてしまう。

「東京見物」も実現しえなかった堅吉との間で、非日常空間を共有できる温泉は、お柳にとって、観光地といえる逗子に育っても、下層の生産者身分にあってはできない（観光）の経験であり、新婚旅行気分を味わえる特別なものだった。温泉という非日常空間を堅吉と共有することで、お柳は、逗子という土地の者としての自分と東京からの訪問者である堅吉との間にあった力関係の不均衡を解消したと見做すことができた。そして、堅吉にとってお柳との境遇の相違を明確にさせた江の島で「曾てお柳が拾集め」ていた貝殻の加工品を堅吉とともに眺めるという出来事は、お柳にとっては土地の者から訪問者へと立場を転換し、夫の立場へ接近させることになっていた。

酌を仕ながらお柳は、行末の事を二言三言問掛けた。（中略）逗子に永く居るか、東京へ行くか、それから如何して暮して行く、なぞであつた。（12:32/469）

そうしてお柳は、温泉場で罪を意識し、葛藤することで妻としての立場を再認識した結果、「逗子に永く居るか、東京へ行くか、それから如何して暮して行く」というように、何の疑念を持つこともなく、堅吉との「行末」に希望を見出してしまったのだ。温泉旅行を通して明らかになるこうした夫婦の認識のズレこそが、本作の悲劇をもたらしているのである。堅吉の一方的な思考ばかりでなく、お柳の思考が立ち現れてくる温泉場は、両者に非日常空間を共有させることで、それぞれに他者を認識し直す契機を与えた。しかし、そうすることで、自覚的にお柳の支配（殺害）を引き受ける堅吉と、夫との将来を期待するお柳の思考のズレを決定的なものにもしているのだ。

堅吉がこの後自死する顛末に美的カタルシスを見出してきた先行研究に従えば、堅吉は暴力の発動者ではなく（美）の殉死者となる。しかし、死ぬ前の「お前をこんなに殺すまで、愛の度が高まつて居たといふ事を一言、いふのを忘れた」という呟きは暴力の正当化にほかならない。そして、堅吉の自死は、戦争によって生じた幻滅や絶望が暴力の行使によって補填しようとする、彼の矛盾した論理や価値観が露呈し、破綻するさま

を表出している。本作は、国家の軍事遂行の論理を支える主体の抱える矛盾と綻びを証左するものなのだ。

これまで同時代的の賞賛と代表作に通ずる美的評価によって、軍事の影とそこに内包される暴力と矛盾が見逃されてきた。しかし、本作の題名ともかかわる妻の殺害、そしてそれを正当化しつつ自殺するという結末は、こうした空間を介して生み出された認識のズレと破綻から捉え直すことが可能なのである。

## 5. 結び

本稿では、江見水蔭の代表作とされる『女房殺し』の位置づけを問い直すために、軍事との関わりに注目して読み解いてきた。猪狩が指摘するように、確かに本作には、作者の美的追究に重ね合わせられるような堅吉の志向性が提示されていた。そうした堅吉にフォーカスした悲劇が同時代評価においても称賛されてきたが、日清戦争という軍事に注目して本作を読むとき、戦争を背景に形成されたマクロかつミクロな暴力が確認できる。軍関係者や医師の提唱で導入され流行した海水浴場のある逗子という舞台は、西洋医学的見地から避暑地として保証されたことによって、都市の上流中流層が流入した別荘地ないし観光地であった。金によってお柳の貞操を奪った薄井、そして、自身と対等な位置づけにはない野蛮で未文明な地と逗子を認識する堅吉の姿は、逗子で搾取と略奪を行う訪問者の姿であったといえる。さらに、温泉旅行の分析を通して、堅吉が妻を殺害し自死にいたるという本作の顛末には、軍事ないし日清戦争従軍兵の戦後の問題が複雑に絡み合っていたことが明らかとなる。すなわち都市から地方へと流入する訪問者による搾取と略奪に留まらず、日清戦争を背景とする帝国主義的な構造の矛盾と破綻を本作は内包していたのだ。そこには、本作が下関条約批准（5月8日）から遼東還付条約批准（11月8日）の間に創作され発表されたことを背景に、「国民」が一丸となって戦争を称揚した日清戦争只中の空気ばかりでなく、戦争が終結しながら戦後処理の決着がつかない膠着した当時の空気<sup>38</sup>が映し出されていたのではないだろうか。

本作は、日清戦争へと突き進んでいく日本という国家のもと共有される価値観や認識が映し出されると同時に、日清戦争後、その影響をいかに個人が引き受けていたのかという戦後の問題を浮かび上がらせていた。お柳の存在には見向きもせず、流星の如く自殺する堅吉に注視された本作の枠組みと本作の受容の在り方は、暴力が立ち現れながらも正当化され、それが受け入れられてしまうような、日清戦争直後の当時の時代状況とその矛盾を相対化させていたのである。

これまで、日清戦争後の社会の暗部を素材主義的に扱った（悲慘小説）と同傾向が看取されたことや、作者江見水蔭の評価の不安定さが影響して、『女房殺し』はよく吟味されてこなかった。しかし、同時代のコンテクストに照らし合わせ、都市と行楽地との間に築かれる支配関係に着目し、軍事および政治をめぐる問題に迫ることで、そうした埋

もれたテキストの解釈の可能性が開かれ得るとともに、歴史の再考の契機が与えられるのではなかろうか。(執筆者の関心はとりわけ「温泉」、その場への移動にあるが、) こうした政治や軍事によって形成された空間に着目し、日本近代文学を再検討することを今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿は第一六回学際日本駒場フォーラム（於東京大学駒場キャンパス）での口頭発表にもとづく。会場内外で貴重なご意見を下さった方々に感謝の意を申し上げる。

## 註

- <sup>1</sup> 本稿の引用は『文芸倶楽部』1 (10) (博文館、1895年10月) に依り、山田有策・猪狩友一・宇佐美毅編『新日本古典文学大系 21 硯友社文学集』(岩波書店、2005年) を参照しながら旧字は新字に改め、総ルビのうち本作特有の読み方のみルビを付す。ブロック引用末尾の括弧内に章番号、初出頁数、硯友社文学集頁数の順に記す。
- <sup>2</sup> 斎藤緑雨「金剛杵」『めさまし草』盛春堂、1896年1月、4頁
- <sup>3</sup> 内田魯庵「批評 江見水蔭の『女房殺し』」『国民之友』(268)、民友社、1895年、780頁
- <sup>4</sup> これらの作品群については、岡保生「観念小説とその周辺」『尾崎紅葉の生涯と文学』(明治書院、1968年)、山田博光「明治における貧民ルポルタージュの系譜」『日本文学』(1963年1月)、立花雄一『明治下層記録文学』(創樹社、1981年)、鈴木啓子「悲惨小説期の貧困表象——嶺雲・一葉・眉山・鏡花の射程」『日本近代文学』(81) (日本近代文学会、2009年11月) などに詳しい。
- <sup>5</sup> 明治大正文学史の復刻に着手し、その一環として水蔭の『自己中心明治文壇史』を復刻・公刊した平岡敏夫は、江見水蔭について『女房殺し』(中略) などで知られるが、現在、この『自己中心明治文壇史』の著者としてのみ知られているかの感がある」としている(平岡敏夫「明治大正文学史集成」・解説 江見水蔭『自己中心明治文壇史』(博文館、1927年) 平岡敏夫編、日本図書センター、1982年)。1900年代の水蔭の文学意識に着目した安藤香苗は、文学研究史上、水蔭が埋もれた作家となった一つの理由としてその活動の通俗性を挙げる。速筆で多作であるがために、同時に完成度の不安定な作品を生み出し、その評価が揺れ動くこととなった(安藤香苗「江見水蔭「鋳夫の恋」からみる一九〇〇年代の文学意識」『大谷学報』100 (2)、大谷学会編、2021年3月)。
- <sup>6</sup> 猪狩友一「(美術) の時代と硯友社——小波・水蔭・曙山」山田有策・猪狩友一・宇佐美毅編『新日本古典文学大系 21 硯友社文学集』岩波書店、2005年
- <sup>7</sup> 石井柏亭「日本に於ける裸体画問題の変遷 中」『中央美術』3 (1)、1918年1月、88頁

- <sup>8</sup> 『旅画師』をはじめとする明治 20 年代初期作品の芸術志向性を後の作品群に接続させる論考は他にも存在する。関塚誠は、「水蔭は濫作をもって語られることが多くなるが、『旅画師』の文学的達成への自負が大きく作用していたと思われるのではないか」としているが、軍事小説や『女房殺し』については触れていない（「江見水蔭『旅画師』論——明治二十年代の芸術観から」『田山花袋文学記念館研究紀要』（33）、館林市教育委員会編、2021 年 3 月）。
- <sup>9</sup> 内田、前掲「批評 江見水蔭の『女房殺し』」、778 頁
- <sup>10</sup> 江見水蔭（平岡敏夫編）、前掲書、202 頁
- <sup>11</sup> 鉄道省「第六章 鉄道敷設」『日本鉄道史』上、1921 年、501-504 頁
- <sup>12</sup> 横須賀線は 1888 年 8 月に着工した。1889 年 1 月 29 日公布勅令第 6 号『鉄道費補充公債条例』によって借入金による建設資金調達が確定した（鉄道省、前掲書、蟹江康光『横須賀線を訪ねる 120 年歴史の旅』交通新聞社、2010 年、沢和哉「軍部の要請と横須賀線の建設 上」『鉄道ピクトリアル』（296）、1974 年 8 月、沢和哉「軍部の要請と横須賀線の建設 下」『鉄道ピクトリアル』（297）、1974 年 9 月）。
- <sup>13</sup> また、開業直後に東海道線が全通し、東海道線との接続を考慮して列車発着時刻が改正されている。『官報』第 1903 号（1889 年 10 月 31 日）付録『全国汽車発着時刻賃金及哩呈表』によると、新橋-国府津間に設定の七往復に対して、上り一本は大船無停車となり、一往復減の一日六往復で横須賀線は運行した。
- <sup>14</sup> 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史通史 2』東京大学出版会、1985 年、123-130 頁
- <sup>15</sup> 三好行雄編『日本近代文学大系 11 森鷗外集 I』角川書店、1974 年、41 頁、62 頁
- <sup>16</sup> 中谷太郎『日本数学教育史』亀書房、日本評論社、2010 年、112-113 頁、薩日娜『日中数学界の近代——西洋数学移入の様相』臨川書店、2016 年、126-136 頁
- <sup>17</sup> 佐藤英二『近代日本の数学教育』東京大学出版会、2006 年、27 頁、中谷、前掲書、10 頁、薩、前掲書、64-101 頁
- <sup>18</sup> 日本天文学会百年史編纂委員会編『日本の天文学の百年』恒星社厚生閣、2008 年、3-26 頁、307-318 頁
- <sup>19</sup> 大蔵省印刷局編「告示 陸軍省 第二三号 臨時測図部測図手召募ノ件」『官報』（3423）、1894 年 11 月 24 日
- <sup>20</sup> 竹内正浩『地図で読み解く日本の戦争』筑摩書房、2013 年、103-129 頁
- <sup>21</sup> 例えば、山口米吉編『日清韓三国明細図』（山口米吉発行、石附鐘太郎印刷、1894 年作製）、嵯峨彦太郎『亜細亜内部大日本韓清地図』（1894 年作製）等の地図がある。
- <sup>22</sup> 江見（平岡敏夫編）、前掲書、241-242 頁
- <sup>23</sup> 長谷川博・内山一男「明治初期の陸地測量教育——攻玉社付属陸地測量習練所を中心として」『土木史研究』（10）、土木学会、1990 年 6 月、146 頁



- 24 酒井敏「軍夫・「文明戦争」の暗部——文学テキストからの照明」『日本文学』45 (11)、日本文学協会、1996年、30頁
- 25 畔柳明雄『海水浴と日本人』中央公論新社、2010年、198頁、逗子市『逗子市史通史編』、1997年、721-729頁、小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」『人文地理』37 (3)、1985年6月、26-33頁、34-36頁
- 26 畔柳、前掲書、21頁
- 27 中川浩一「横須賀線の歴史過程」『鉄道ピクトリアル』(503)、1988年11月、12頁
- 28 前掲『新日本古典文学大系 21 硯友社文学集』、463頁
- 29 『海人』は次のような物語である。父不比等は唐の皇帝から貰った宝珠を龍宮に取られてしまい、その宝珠を取り返すために訪れた志度の浦である一人の海女と結ばれた。父不比等は海女に頼み、産まれてきた子を世継ぎにするという条件で、宝珠を取り返してきてもらったが、その代わりに傷を負った母は命を落としてしまった。志度の浦へ訪れその話を聞いた房前は、幽霊となった母を弔い、追善供養した(竹本幹夫『海士・海人 対訳でたのしむ』檜書店、2001年、横道万里雄・表章編『日本古典文学大系 40 謡曲集 上』岩波書店、1960年)。
- 30 「軍夫の幽霊」、「破茶碗」、「負傷兵」など『速射砲』および『水雷艇』に収録された作品には、こうした国家に貢献する夫を見送り、名誉の負傷を負った夫を迎え入れる子どもを抱える妻の姿が多く描出されている。
- 31 エドワード・サイード『オリエンタリズム』上・下、今沢紀子訳、平凡社、1993年 (*Orientalism*, 1978)、『文化と帝国主義』1・2、大橋洋一訳、みすず書房、1998年 (*Culture and Imperialism*, 1993)、小森陽一『ポストコロニアル』岩波書店、2001年、小田英郎「植民地支配の原理」『新訂増補 アフリカを知る事典』伊谷純一郎他監修、平凡社、1999年
- 32 なお、こうしたお柳を嫌悪し、薄井と同等の立場を守ろうとする堅吉の態度を通して、戦争を背景に構築されるホモソーシャルな男性権力の関係をも読み解くことができるだろう。
- 33 東義晴「明治期におけるリゾートの形成——海水浴の普及過程に着目して」『流通経済大学社会学部論叢』15 (1)、流通科学大学、2004年、30-36頁
- 34 有山輝雄『海外旅行の誕生』吉川弘文館、2002年
- 35 広田栄太郎『近代訳語考』東京堂、1969年、43-48頁
- 36 東京朝日新聞、朝刊、1904年11月29日付、5頁5段
- 37 「第五編 転地療養所記事」『東京陸軍予備病院衛生業務報告 後編』東京陸軍予備病院、1898年、745-841頁
- 38 大谷正・原田敬一編『日清戦争の社会史——「文明戦争」と民衆』フォーラム・A、1994年